

平成22年度沖縄群島病害虫発生予報第3号(6月予報)

6月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	30	40	20
平 年 並	40	40	40
低い(少ない)	30	20	40

(平成22年5月28日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

地点別の平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	26.6	29.2	24.6	211.6	182.2

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

6月の発生予報および防除上の注意事項

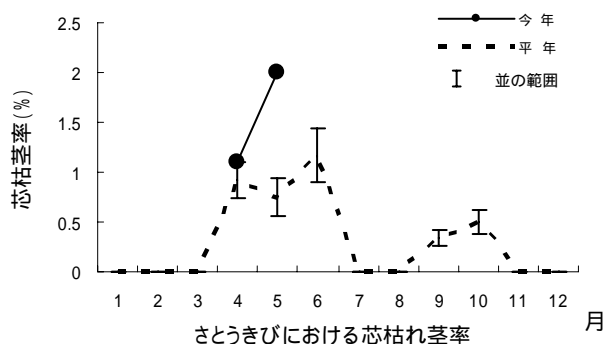
1 さとうきび

(1) メイチュウ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 5月下旬の調査の結果、春植圃場の芯枯茎率は2.0%(前年1.3%、平年0.8%)と平年より多かった。
- b 5月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は、1.4頭(前年3.2頭)であった。



< 防除上注意すべき事項 >

- a 葉裏や葉鞘でふ化した幼虫は株元近くへ移動し、芽や根帯から株の内部に食入して生長点を加害し、芯枯れを引き起こす。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除に重点をおく。
- c 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。

2 マンゴー

果実肥大～成熟期の病害虫防除対策

- 5月下旬の調査の結果、一部の圃場でチャノキイロアザミウマの発生が認められた。
- チャノキイロアザミウマの発生源となる不必要な新梢や摘葉・摘果残渣はビニール袋に入れるなどして、施設外へ持ち出し処分する。
- 梅雨明け後、袋がけ作業終了とともに天井ビニールを取り外し、通風採光に努める。

3 かんきつ

果実肥大期の病害虫防除対策

- 5月下旬の調査の結果、ミナミトゲヘリカメムシおよびアレスミカンナガタムシの発生が認められた。
- ミナミトゲヘリカメムシは成・幼虫とも果実を吸汁加害して落果させ、アレスミカンナガタムシ成虫は葉を食害し、幼虫は樹皮下を潜孔食害する。
- 梅雨明けを迎え気温の上昇とともに両種とも個体数を増加させ、例年(6月下旬～7月上旬)被害も増大することが予想されることから薬剤による防除を徹底する。

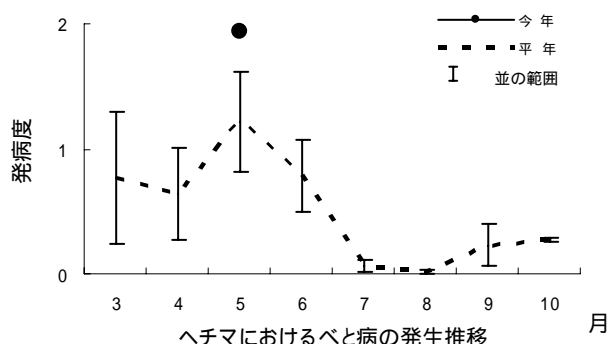
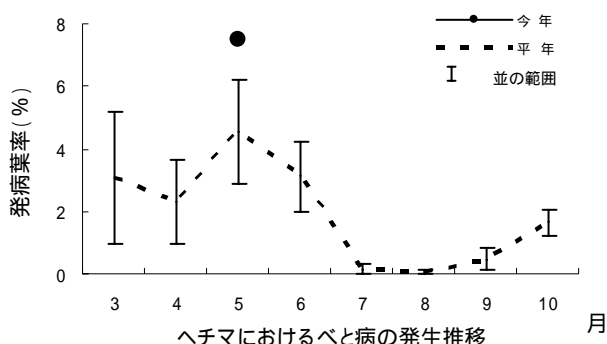
4 へちま

(1) ベと病

発生程度 : やや多

予報の根拠

- 5月下旬の調査の結果、発病葉率は7.5%(前年5.6%、平年4.5%)、発病度は1.9(前年1.4、平年1.2)と平年よりやや多かった。
- 本病は多湿条件下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の降水量は並または多い確率がそれぞれ40%と予想されており、発生はやや多のまま推移すると考えられる。



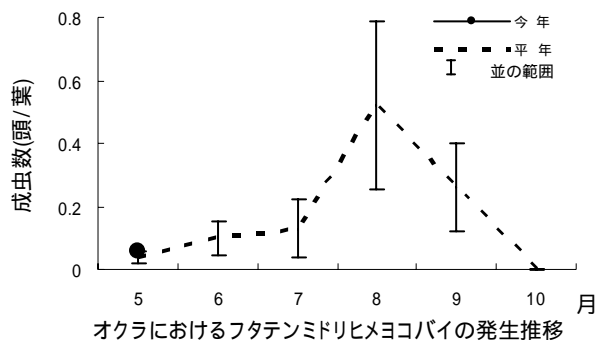
< 防除上注意すべき事項 >

- 雨滴等による病原菌の跳ね上がりを防止するため敷草かビニールマルチを行う。
- 排水、通風をよくする。
- ハモグリバエ類幼虫の食害痕等から病原菌が侵入しやすいので同虫の防除を行う。

5 オクラ

(1) フタテンミドリヒメヨコバイ
発生程度 : やや多
予報の根拠

- 5月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年よりやや多かった。
- 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は平年並が40%の見込みで、本種の発生も平年並で推移すると考えられる。
- 平年の発生推移を見ると、今後増加傾向にある。



< 防除上注意すべき事項 >

- 多発すると被害葉は黄変萎縮するので、葉裏を観察し、早期発見・早期防除に努める。
- 平成18年度病害虫発生予報第2号(5月予報)の表紙参照。